

ロジータ・ミッソーニさんと森 英恵さんの2人のキャリア形成の比較

— 家族とのかかわりから「Roots」（ルーツ）を探る —

田中 規子

はじめに

ともに一流ファッションデザイナーの Rosita MISSONI (ロジータ・ミッソーニ)さんと、森英恵さんの2人が同じステージで対談された。実は今回の再会は10数年前のニューヨーク・コレクション以来ということもあり、2人が始終やわらかな眼差しでお互いを敬いながら話をされていたことに深く感動した。まるでニューヨークが2人のキャリアの出発点であったかのように、2人の話には多くの共通点があった。以下、2人のキャリア形成がどのような要因によって達成されたのか、家族とのかかわりを手がかりに、そのルーツを探る。

ミッソーニさんのルーツ

まず、Rosita MISSONI(ロジータ・ミッソーニ)さんのルーツだが、イタリアで幼い頃からファッションに強く魅せられていたようである。1953年に結婚し、夫のオッターヴィオ・ミッソーニ氏と共にミッソーニ株式会社を取り仕切り、50年以上もの社歴を積み重ねてきたという。

ミッソーニさんの略歴によると、「ミッソーニの話になると、自然とミッソーニ家の話になる」とある。なぜならば、「この会社はミッソーニ夫妻の歴史そのものだから」ということであり、言い換えれば「家族が会社であった」ということであろう。ミッソーニさんは話の中で、会社が大きくなるにつれて、子どもたちと接する時間が少なくなったという。そのことについてとても心を痛めていたようだが、仕事場と自宅が同じ建物内にあったことから、3人の子どもたちは、自宅にいるかのように仕事場のマシンや余り布で遊ぶようになったという。子どもたちと接する時間は確かに少なくなったようだが、自宅と同じ仕事場で子どもたちが遊ぶことが、子どもたちにとっては、ずっとミ

ッソーニ夫妻と一緒にいる感覚をもたせたのかもしれない。また、長期のバカンスには、ミッソーニ夫妻が子どもたちに、自分自身の仕事への情熱を語って聞かせている。この情熱が、ミッソーニさんの創造力の源であるように思う。そしてこの情熱こそが、ミッソーニファミリーの企業としての「MISSONI」をも育んできたのではないかと思った。

森 英恵さんのルーツ

他方、森英恵さんは、医師を父に持ち、兄弟もすべて医師という家庭で育った。森英恵さんの話の中で特に印象深かったのは、父親の森さんに対する箴言であった。それは「自立するのであれば、医師になるか、そうでなければ、お嫁さんになること」という、二者択一の選択肢しかなかったことである。しかし、その反対を押し切り、森さんは大学卒業後、デザイナーを目指した。1965年に初の海外コレクションを発表し、「East meets West」(東洋と西洋の融合)と絶賛され、1977年にはパリにメゾンを開いてパリ・オートクチュール組合に属する唯一の東洋人として国際的なデザイン活動を展開した。その際に、森 英恵さん自身が大切に忘れていたことが、日本人としての自分たちの「ルーツ」であった。

まとめ

森英恵さんもミッソーニさんと同様にキャリア形成にすばらしい家族を得たこと、そのなかでキャリアが育てられてきたことをあげていた。ここまで仕事を続けられたのは、夫の協力や子どもたちがいたからと。私の小さな疑問は、もしも2人が家族をもたなかったら、この偉大な2人のデザイナーが誕生しなかったであろうか?という点である。